四山鉱の坑底から

四山指導部　片山末吉

有明海の夕は美しかったが

地底では熱中症続出

いざ人車で坑底へ

ここは四山鉱。竪坑ケージを降り、坑底の五百二十メートル水平人車（坑内労働者が、坑底の各職場をめざすため乗る）に乗る。十四輌編成の水平人車は岩粉とほこりを舞い上げながら、詰に向かってスピードをあげていく。

突然、ゴーッという音とともに巨大なかたまりが通りすぎていった。思わず、ハッとする。石炭を満載した重連電車だ。スピードを落とさずに離合するのに、もし脱線でもしたら……と思うとゾッとする。去年のこと、脱線事故を起こし、アーチ枠をひき倒して無残にも坑道に横たわっていた重連電車の姿が、一瞬脳裏をよぎる。

二十分くらい乗ったところで水平人車を降り、こんどは三十五御の斜坑人車に乗りかえる。隣りの人がしきりに話しかけるが、石炭を運んでいるベルトコンベアーと人車の音で、何をいっているかさっぱりわからぬ。騒音と粉塵にまみれた、過去二十年という長い坑内生活で、耳が少し遠くなったのかも知れない。

そういえば、以前はどんなでもなかったが、地下六百メートルの片盤材料線坑道にある休憩所にたどり着く。辺りには前チェックだとか、ZD運動のマークのはいったものなどのポスターがやたらと目につき、三池炭鉱の労務管理の厳しさの一端をうかがわせる。

水と共に食う弁当

そこ、ここにみかんの皮や残飯が捨ててあって、餌を求めるネズミがうろちょろしている。

今日の作業場所は三十五添御西のだった。

三池炭鉱の出炭は、今一日で二万トン。年間五百四十万トンという出炭は、全国の出炭額の約三分の一を占める。出炭能率は、百トン（労働者一人月当たりで）に近い。他山では思いもよらぬ高い能率である。年間三十五億円という黒字だが、その蔭で現場の労働者がどれほど苦しめられていることか。

温度計を見る。五十五度ある。今坑外では、寒風が吹きすさんでいる、というのに。生産会議の席で、「三十度以上の高温箇所はつくらない」などとシラをきった鉱長の憎らしい顔が浮んでくる。

作業にとりかかるか、どうすべきか、一瞬とまどう。ためらっていると、まわりの仲間はどんどん作業にとりかかっていく。

といったのにこの熱さ。

しぶるAさんを、「いっしょに出よう。あとは俺が責任をもつ」といって、無理に現場からつれ出した。

休憩しなければと、途中束になっているケーブルの淵に腰をおろす。とたん、ベチャッという感じがした。あわてて飛びのいたところ、何と大便がしてあった。そのうえに腰をおろしたのだとわかった。炭塵をかぶっていたため真っ黒になっていたので、それと気がつかなかったのだ。ほんとに、三池炭鉱の坑内には便所はないのだと思い知ったのである。

思えば先ほど通気門を開けた時の異様なにおいもそうだったが、そこかしこに立ちこめている臭気は、まさに労働者が排泄する糞尿のせいからくるのがほとんどだろうか。

「坑内に便所を……」という俺たちの要求に耳をかさず、まるで虫ケラのように扱うことしか知らない経営者、会社幹部の経営感覚に対して、思わず怒りがこみあげてくるのだった。

——坑内に便所をつくれ。

——坑内温度を、二十八度以下に維持せよ。

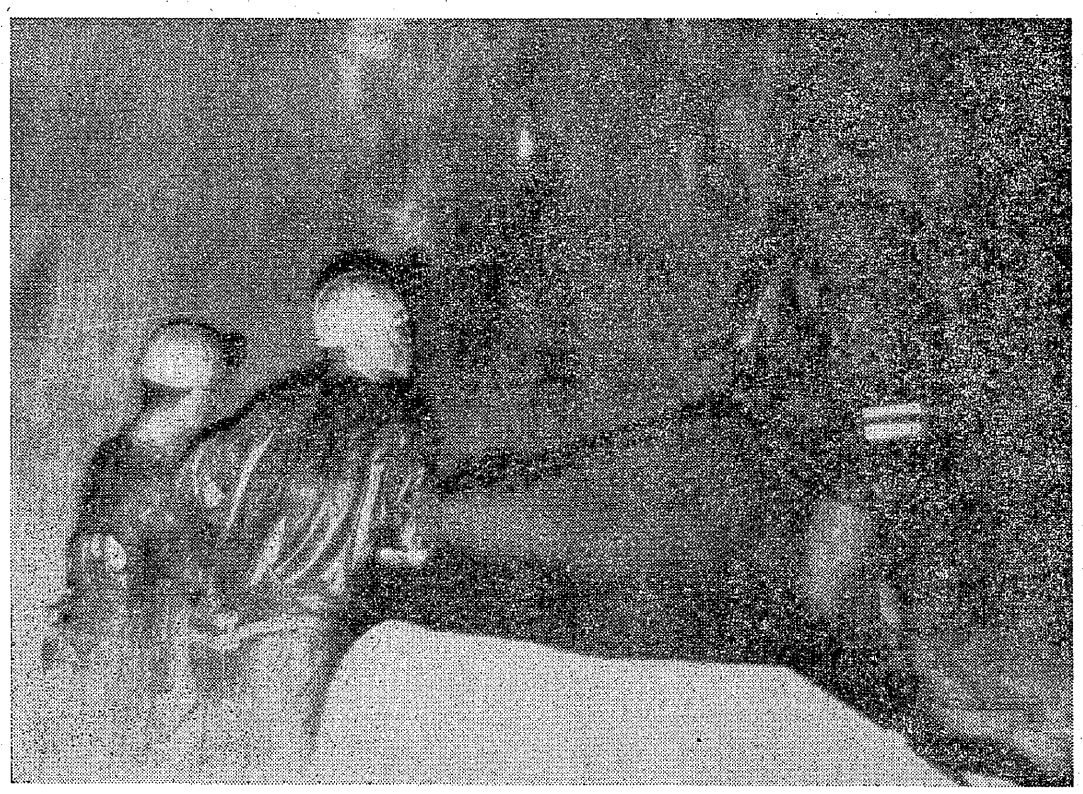
——すべての職場に休憩所を設けよ。

この要求は、俺たち三池炭鉱の坑内労働者の、人間としての最低の要求であり、当然の権利にもとづいていることだ。

海は美しかったが

その日昇坑した時のこと、「あんたのお蔭で、今日は熱中症で倒れずにすんだばい」、と両の目を細めたAさんの言葉がうれしくてならなかった。

うっすらと雪化粧をした秀峰雲仙岳がはるか彼方にそびえ、波ひとつない夕方の有明の海は、ことのほか美しかったが、この有明海の地底に眠る八—十億トンにものぼるといわれる石炭が、それを掘り出す労働者ばかりでなく、すべての人のしあわせのための富となるのはいつの日のことだろうか。そんな思いが、ふと胸のなかをかすめた。



坑底の掘進現場の写真。滝のように流れる汗をほとばしらせながら、岩盤にいどむ坑内労働者。ここは有明海の底、深さ500メートルほどのところ。ちよつとの手違いも許されぬ。

十片で、払の排気道だ。

通気門を開ける。一種異様なにおいが、むっと鼻をつく。

熱さと、もうもうたる粉塵で頭がぼーっとなる。防塵マスクをつけると息苦しくなる。心臓の鼓動が激しくなり、思わずはずそうと思い、手をやってしまう。一瞬耳もとに、不治の病いのけい肺に冒されてしまい、苦しみ、もだえ、血を吐きながら、最後まで妻子の名を呼び続けて死んでいった、仲間の叫び声が聞こえてくる。

ケーブルを敷設する者、枠脚をいれる者。やがてのことどの顔も真っ黒になり、どの仲間のシャツもパンツもぐしょぬれになる。

スイッチをかついでパンツアーコンベヤーの落ち口までやってくると、ダイナマイトの煙と粉塵とで一寸先も見えなくなってしまった。そのなかで、採炭工の仲間の四、五人が弁当を開いていた。

つかれからか、食欲がない。みな一様に押し黙ったままだったがそのうち一人が水筒を取り出し、その水を弁当にぶっかけて食べ始めると、右へならえでもするかのように、みんなは飯を食べ始める。

休憩所もなく、ただ硬（ボタ）のなかに身を沈ませながら弁当を開く坑内労働者の怒りを、三井石炭の経営者と新労組幹部は知っているのであろうか。

高温のなかの作業

クーラーの移設作業を行なうために、払跡の現場にゆく。熱気は一段と強まってくる。二、三日前三十八度もあったといわれる、高温箇所である。

繰り込みの時のこと、係員は「坑道が貫通して、風量がふえたから、現場は涼しくなっている」

よしよし、一人だけで作業拒否したところで闘いにもなるまいし、そのうちにみんながきっとばってくるだろう。その時作業を中止してもよいだろう、と心をきめて作業にとりかかる。

坑内に便所もなく

ふき出す汗。それがごみとともに目にはいるので、すぐに目があけられなくなってきた。

三十分もたったろうか。新労組員のAさんが顔を真っ赤にし、ふうふういいながら出てきた。もう足がよろけている。まだ作業は残っているが、もうこれ以上作業を続けたら熱中症で倒れてしまう。

しぶるAさんを、「いっしょに出よう。あとは俺が責任をもつ」といって、無理に現場からつれ出した。

休憩しなければと、途中束になっているケーブルの淵に腰をおろす。とたん、ベチャッという感じがした。あわてて飛びのいたところ、何と大便がしてあった。そのうえに腰をおろしたのだとわかった。炭塵をかぶっていたため真っ黒になっていたので、それと気がつかなかったのだ。ほんとに、三池炭鉱の坑内には便所はないのだと思い知ったのである。

思えば先ほど通気門を開けた時の異様なにおいもそうだったが、そこかしこに立ちこめている臭気は、まさに労働者が排泄する糞尿のせいからくるのがほとんどだろうか。

「坑内に便所を……」という俺たちの要求に耳をかさず、まるで虫ケラのように扱うことしか知らない経営者、会社幹部の経営感覚に対して、思わず怒りがこみあげてくるのだった。

——坑内に便所をつくれ。

——坑内温度を、二十八度以下に維持せよ。

——すべての職場に休憩所を設けよ。

この要求は、俺たち三池炭鉱の坑内労働者の、人間としての最低の要求であり、当然の権利にもとづいていることだ。

防寒着を支給せよ

本所指導部　平川勝俊

寒い冬空より白い雪が降り、川面より吹きつける寒風は肌身を刺す。

ぶるっと身ぶるいしながら、仕事を続ける。寒さに耐えるためにそれぞれ工夫をこらしているのです。

三川鉱、四山鉱、さらには有明鉱の坑木を貯木している浜坑木場は、大牟田川の河口にある。また三川坑木場は、諏訪川の河口にあります。

冬場の坑木場は潮風が直接吹きつけ、そこで働く者に寒さはひとしおである。ことに三川坑木場は夜勤もあり、坑木の払い出し作業は深夜も続けられる。防寒着なしでは、とうてい耐えられない職場であります。

職場では、そんなにきびしい作業にたずさわる者として、七項目の要求を会社側に出し、交渉を行ないました。なかでも防寒着を支給してもらいたいとの要求は、まさしく坑外の、しかも室外で働く者全体に共通する切実なものですが、職制の答えは、「私のところでは返答はできません」と、誠意の一片すら見られませんでした。

「あなたは返答できないというが、防寒着の必要性は認めるでしょう」、とせまる問いに、全然返事をしない。それは、防寒着の必要性がわかっている証拠です。

それらの要求は、働く者として当然な、最低の要求のはずです。このような職場それぞれの要求を全職場の要求としてとらえ返して闘うときこそ、福利・厚生に関する要求の実現だけでなく、春闘勝利に通ずる道まで切り開くことを信じています。

私たちの職場にも はげしい合理化が

愛媛　島本保則

前略。

私は四年前の第十一回三池にまなぶ全国集会に参加しましたが、その時の三池の組合員の方々の暖いお世話を、いまでも肌身にぬくもりのように感じています。

私が泊ったのは宮浦指導部の馬渡地域分会でしたが、松浦さん、藤本さん、太田さんなどの顔がいまも浮かんできます。あのときは、ほんとにお世話になりました。

私たちの電通の職場でもはげしい合理化がかけられ、人減らし、労働内容の大幅な質的変化が目に見える形で出てきています。資本の側の常とう手段ですが、組合員のなかに対立を持ちこんでいます。

しかしなかなかどう反撃していったらいいのか、これまで学習してきたつもりですが、糸口がつかみかねています。三池労組の、新労への働きかけなど、まだ三池に行って学びたいことがたくさんです。

第十四回三池にまなぶ全国集会は、前回に比べて参加ワクが半減しましたが、門戸がせまくなって県代表になって三池に行けるかどうか心配ですが、なんとか行ってみたいと思います。

私も、労働組合やまなぶ友の会の活動に力を入れ、これからもがんばっていきたいと思います。

同封のお金は、機関紙〝みいけ〟を二年間読ましていただきたくよろしくおねがいします。

×

島本さんへの連絡は「松山市平和通四丁目一—一〇、松山北統制無線中継所」です。ご健闘を祈ってやみません。